

【10年間の計画概要】

スーパーグローバル大学創成支援事業 工程表

項目	H26	H27	H28	H29-30	H31	2020-2022	2023
外国人留学生(通年)	(H25) 764人		1,000人		1,250人		1,600人
留学経験者数(通年)	(H25) 541人		700人		900人		1,200人
グローバル化関連	グローバル教育カレッジの設置・体制整備	グローバル教育カレッジ設置 特任教員・コーディネーターの採用 SGUシンポジウムの実施	特任教員等の採用 カレッジ施設整備	学部教育のグローバル化の推進			
	グローバル教育科目の開発・実施	グローバル人材教育センター設置 グローバル科目検討開始	教養科目への導入割合：5%	20%	50%		
	日本語・日本事情科目の充実	日本語・日本文化教育センター設置 日本語クラス講義室の整備	日本語・日本事情科目の充実				
	熊大グローバルYouthキャンパス事業	オープン教育センター設置 高大連携事業	事業参加者数：250人	550人	700人		
	海外拠点の拡充・グローバル広報の強化に向けた取組	交流協定校等での広報活動の実施 広報ツールの開発	海外拠点の拡充 グローバル広報活動の実施				
教育の改革取組関連	多面的な入試の開発・実施	国際バカロレア、TOEFL等外部試験の活用 海外AO入試の実施					
	グローバルリーダーコース	開発検討・設置準備		4学部新設	拡充		
	海外連携教育コース	2コース	4コース	16コース	20コース		
	教育システムの改革	ナンバリング シラバス英語化等の検討	全学全科目でのナンバリング・シラバス英語化、学生による授業評価を展開				
	柔軟な学事暦・入学期等の導入		クォーター制の検討	クォーター制の導入			
ガバナンス関連	組織の整備	SGU推進本部設置 グローバル推進機構設置	組織体制の見直し		グローバル関連組織の改組	組織体制の強化	事業終了後の維持体制指針の整備
	事業推進の評価		準備	自己評価 外部委員会	自己評価 外部委員会		
	環境整備	宿舍の混住等の検討	宿舍の混住促進、民間施設活用の促進				
	グローバルな人事システムの整備	教員の国際公募等の検討	教員の国際公募、教員・職員の年俸制の導入、テニュアトラック制の導入				
	国際通用性の高い教職員の育成	FD研修実施(延べ19名参加) SD研修実施(延べ69名参加)	FD、SDの研修拡充・実施				

【特徴的な取組(国際化、ガバナンス改革、教育改革等)】

教育改革を基盤とした「真のグローバル大学」への進化を目指し、世界に伍する研究拠点大学としての地位を確立することを目的とした取組である。具体的には、以下の4つの目標を掲げ、大胆かつ実行力のある改革を行う。

1 国際通用性の高い学部教育システムの導入

海外の学事暦に対応する新しい教育システムを導入し、大学院への早期入学や海外留学の期間確保、柔軟な単位互換等を促進する。また、教育のグローバル化を推進する組織としてグローバル教育カレッジ(「カレッジ」)を新設し、英語によるリベラルアーツ科目の提供や学部専門課程における「グローバルエリート育成特別コース(特別選抜コース)」を支援する。

2 世界から留学生が集うグローバル環境の提供

日本語や日本文化を学ぶ留学生に対して、より質の高い教育カリキュラムを提供するため、グローバル教育カレッジは外国人留学生や研究者の受入を促進する。

3 世界最先端の研究を支える大学院教育のグローバル化と先鋭化

学部教育から大学院教育まで一貫したグローバル教育プログラムを導入し、グローバルに活躍するエリート人材を育成する。海外派遣制度を整備し、また、欧米の大学を中心にダブルディグリーや国際共同研究をベースとしたレベルの高い海外連携教育プログラムを実施する。

4 世界に開かれた地域づくりを牽引するグローバルキャンパスの提供

グローバル教育カレッジが、熊大グローバルYouthキャンパス事業を実施する。同事業では、地域の高校生等に対して早期のグローバル教育の機会を提供するとともに、海外派遣プログラムの企画、開発及び運営等を支援し、地域に根ざしたグローバル化を推進する。

2. 取組内容の進捗状況(平成26年度)

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

○ 「グローバル教育カレッジ」の設置と教育のグローバル化

教育のグローバル化を加速的に展開していくために、グローバル教育の支援及び留学生のトータルケアなどを担う「グローバル教育カレッジ」を創設。「グローバル人材教育センター」では、日本人学生向けの新派遣プログラム(米国)導入、英語による教養・リベラルアーツ科目(グローバル科目)の開発を進め、英語による短期留学プログラム(受入)の強化と教養教育への導入に着手した。「オープン教育センター」では、県内のSSH採択校への海外研修サポートなど、早期グローバル教育の機会を提供した。



〈海外研修におけるポスターセッション〉

○ スーパーグローバル大学創成支援キックオフシンポジウムの開催

平成27年1月、先進的なグローバル化の取組を行っている英・リーズ大学ほかの学長等を講演者に招き、熊本大学SGU構想の紹介、我が国のグローバル教育促進に向けた連携等について意見交換を行った。シンポジウムには、県内の大学・高校関係者、行政及び地域の一般市民を含む約250人が参加し、SGU事業の目的・目標とその実現に対する関心と理解が深まった。



〈SGUシンポジウムに250人が参加〉

○ 留学生受入拡大に向けたプロモーションビデオを制作

熊本大学の留学生や地域市民らの参加・協力を得て、留学生誘致を強化するために多言語のプロモーションビデオを新たに制作した。SGU事業専用のホームページで公開するとともに、交流協定校への訪問や各種留学フェア等の行事において積極的に活用した。

動画URL: www.c3.kumamoto-u.ac.jp/kumadai/movie/



〈動画「Act Now!」(熊大Youtubeで公開中)〉

ガバナンス改革関連

○ SGU事業の推進と大学のグローバル化に向けた新組織の設置

学長を機構長とする全学組織「グローバル推進機構」を平成27年3月に設置し、学長ガバナンスとリーダーシップの発揮による全学的なグローバル化推進の組織体制を整えた。

また、同機構の統轄下に「グローバル教育カレッジ」を創設し、教育のグローバル化に関する様々な取組を始めており、活動拠点として「グローバル教育カレッジ」専用の施設整備を平成27年度中に行うことを決定している。



〈グローバル教育カレッジ棟(平成28年3月完成予定)〉

○ 職員の国際業務スキル向上研修(SD研修)

事務職員のグローバルなスキルの高度化に向けて、平成26年度後期に半年間の通学型語学研修を実施し11人が修了した。

また、海外派遣型の研修として1人がフィリピンにおける英語研修及び交流協定校国際課でのインタビューを含む研修に参加し、グローバル業務への対応力を高めた。なお、平成27年度は、グラスゴー大学等欧米の大学でもSD研修を実施する。

教育改革関連

○ 「グローバルエリート育成特別コース」の設置準備

学部教育におけるグローバル人材育成を実現するために、「グローバルエリート育成特別コース」の設置検討を開始した。また、国際通用性の向上や教育プログラムの体系化の観点から、科目ナンバリングや多言語化にも対応できる新シラバスシステムを平成27年1月から導入した。さらに、先行大学の事例を調査するとともに、平成28年度からのクォーター制導入に向けて、検討を行った。



〈フィリピン大学ディリマン校におけるSD研修〉

■ 大学独自の成果指標と達成目標

○ 海外連携教育コースの拡充

ダブルディグリー・プログラム等の海外連携教育コースを拡充するため、平成27年3月にボルドー大学(フランス)と新たなダブルディグリー協定を締結した。また、サブサハラ・アフリカ地域の大学との交流を始めた。平成26年度は、ルワンダ国立大学等、新たに24件の交流協定を締結し、積極的な海外連携の強化・拡大を図った。



〈ダブルディグリー協定書を取り交わす日仏の学長〉

○ 熊大グローバルYouthキャンパス事業

本学が蓄積したグローバル化の資産を地域社会に還元するため、「熊大グローバルYouthキャンパス」事業を展開する。平成26年12月には、グローバル人材及び留学について議論を深めるため、高大接続シンポジウム「高校生と大学生のぶっちゃけトーク!」を開催し、熊本県内の公私立高校12校から24名の高校生が参加した。



〈高大接続シンポジウム風景〉

○ グローバル教育推進のための海外FD研修

本構想で提供するグローバル科目など英語による教育に取り組む教員支援のため、平成27年3月に本学の交流協定校のカナダ・アルバータ大学に1週間教員を派遣し、英語による教授法等に関する現地研修を実施した。参加者は、授業での有効な英語表現、コミュニケーション・プレゼンテーション技能を学んだ。平成27年度は2週間程度の現地研修を予定している。



〈カナダ・アルバータ大学での海外FD研修〉

■ 大学の特性を踏まえた特徴ある取組

○ 研究大学として国際先端拠点研究・教育プログラムを推進

平成25年度文部科学省「研究大学強化促進事業」の採択を受け、研究の国際化と研究力の強化を図るため、大学院先導機構拠点形成研究部門内に、新たに、生命科学系、自然科学系、人文社会科学系の国際共同研究拠点を整備した。各拠点に配置された卓越教授のマネジメントのもとに、海外研究者の招へい、優秀な海外若手研究者の雇用、国際セミナーの定期的開催、海外ジョイントラボの整備等を進めている。また、URA、国際研究コーディネーター等を配置し、研究費獲得及び知財取得への支援、国際共同研究にかかるイベント開催の支援、外国人研究者や留学生への事務支援など、全学的な国際研究促進に向けた活動を実施している。



〈生命科学系国際共同研究拠点施設〉

○ 地(知)の拠点として地域に学び問題解決ができる人材を育成

平成26年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業(COC)」の採択を受け、地域に根ざした大学として、地域に学び、創造力を持って課題解決ができる人材の育成を目指している。平成26年度は、学長をリーダーとする「地域創生推進機構」を設置し、教育・研究・社会貢献を柱に協力機関との連携も強化するなど、運営体制の整備・充実を図った。また、新入生を対象とした初年次教育では、地域の課題を知るために熊本の歴史、文化、産業、医療、環境について広く学習できる「肥後熊本学」の導入をはじめ、地域社会との繋がりがや地域貢献の意識を高めるカリキュラムを充実していくための検討を行っている。



〈地域ラボを活用した学生と住民によるCOC研究発表会〉

3. 取組内容の進捗状況(平成27年度)

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

○短期受入プログラムの充実

これまで熊本大学の海外交流協定校に在学する学部生を対象に年1回の日本語によるサマープログラムを実施してきたが、今年度は初の試みとして、英語によるサマープログラムとスプリングプログラムを追加し、計3回の短期受入プログラムを実施した。

東アジア、ASEAN諸国及び米国から参加した計111名の留学生が、座学や見学旅行等の様々な活動を通じて、日本語及び日本文化を体験した。

また、英語によるサマープログラム及びスプリングプログラムでは、留学生と高校生との国際交流活動イベントを企画し、留学生は講義や見学旅行で学んだことを発表し、熊本県内の高校生と英語でディスカッションを行った。



〈 英語によるサマープログラムを実施 〉

○海外語学研修プログラムの拡充

夏季・春季休暇を利用し海外の協定校等へ学生を派遣する海外語学研修を年間5件から8件に増加し、派遣先の拡充を行うとともに内容の差別化を図り、学生に多様な留学の機会を提供している。

派遣先としてモンタナ大学(米国)、リーズ大学(英国)、マッセー大学(ニュージーランド)のほか、東南アジアとしてタイの協定校も企画し、8件合計で100名以上の学生が参加した。学生に語学のみならず各国独自の文化に触れる場を提供することにより、異文化理解の一助となった。



〈 ニュージーランドでの研修プログラム 〉

○グローバル科目の開設

平成27年9月より、教育のグローバル化及び学生の国際交流促進等を担う「グローバル教育カレッジ」において、留学生と日本人学生が共に学ぶグローバル科目(英語による教養・リベラルアーツ科目)を20科目開設した。主に短期留学プログラムの英語コースを専攻する学生を対象とし、延べ74名の履修登録があった。また、自主的に授業を聴講した20名の日本人学生と共にディスカッションを伴う授業を実施した。



〈 グローバル科目での授業風景 〉

ガバナンス改革関連

○グローバル教育カレッジの体制整備

グローバル教育カレッジにて、国際公募により外国人、外国での学位取得者、外国での職務経験者等、国際経験に秀でた教員を雇用し、スーパーグローバル事業推進による大学のグローバル化のための人員体制を整えた。また、採用された教員が中心となり、在校生やSGH・SSH指定校を中心とした九州地区の各高校に所属する生徒へ向けて国際交流の機会提供を開始し、平成28年度以降のグローバル科目導入に向けた準備を開始している。

○職員の国際業務スキル向上研修(SD研修)

事務職員のグローバルなスキルの高度化に向けた研修として、通学型語学研修(半年間)、テーマ型のビジネスライティング研修、異文化コミュニケーション研修を開講し、計54人が受講した。

また、実践力を高める海外派遣型の研修を行い、英国グラスゴー大学等において、自らの企画に基づくインタビュー型研修1人(4週間)、フィリピンにおける英語研修1人(2週間)、海外留学フェア等での業務研修5人が参加した。この他、e-learning型TOEIC講座、TOEIC試験の受験補助等により、外国語力基準(TOEFL-iBT80点相当以上)を満たす職員数が38人となった。(平成28年2月末現在)



〈 グラスゴー大学におけるSD研修 〉

教育改革関連

○平成29年度「グローバルリーダーコース」を設置

国際的に活躍する学生を育成する「グローバルリーダーコース」の設置を決定した。平成29年度に募集する学部及び定員数は、文学部・法学部・理学部が各10名、工学部が20名である。






このコースでは、4学部の連携・協力のもと、独自の教育プログラムであるGOKOH School Programを提供する。

学生は、入学後2年間は英語による授業や専門科目の履修、海外留学などを通して、国際的に活躍できるコミュニケーション力や専門基礎力を養成。3年進級時に希望する学科・コースを選び、多様な価値観を理解できる豊かな教養と国際感覚をベースに高度な専門的能力を習得する。

なお、28年度は、より具体的なカリキュラムの検討及び入学前教育を実施する。

GOKOH School Program

Carrying the Tradition and Advancing with the Spirit

グローバルな視点  Global perspective
開かれた心  Open-mindedness
知識構築は  Knowledge building for
最大限の可能性を引き出し  Optimal possibilities and
より高い目標へと導く  Higher goals

〈 GOKOH School Program 〉

○教育のグローバル化への制度整備

柔軟な学事暦により日本人学生の海外留学、留学生の受入の拡大を促進するため、平成28年度から教養教育におけるクォーター制を導入し、平成31年度までに全学に導入することを決定した。また、授業科目にナンバリングコードを附番して、各教育プログラムにおけるカリキュラムの体系性を明示し、ナンバリングコードを新シラバスシステムに反映することとした。さらに、教育システムの国際通用性の向上のため、海外からも閲覧することができるシラバスシステムの運用を開始した。Web上で英語版シラバスが公開されることで、本学から海外の大学へ留学する場合、また、海外から本学へ留学する学生の履修指導や単位認定に活用することが可能になった。

■ 大学独自の成果指標と達成目標

○グローバルYouthキャンパス

熊本県内の高校生を対象に、サマープログラム及びスプリングプログラムに参加している交流協定校の留学生と交流する機会を設け、高校生とプログラムに参加の外国人留学生が交流を深めた。

また、8月のオープンキャンパスでは「熊大グローバルYouthキャンパス サマー・フェスタ」を開催し、九州内の30校以上の高校から100人を超える高校生が参加した。交換留学経験のある在学生による留学体験発表や国際交流ゲーム、オーストラリアへ交換留学中の日本人学生とのSkypeを通じたセッションが行われ、外国人留学生や留学経験者と交流した。

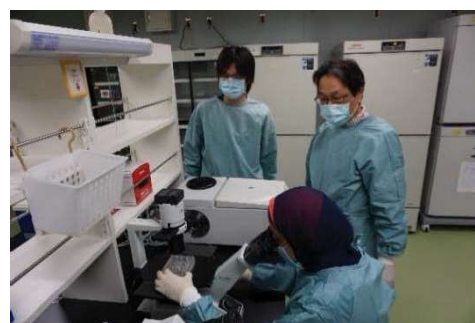
年間8件のイベントに384名の高校生が参加し、熊本大学での留学プログラムや留学について興味を深める機会となった。



〈 グローバルYouthキャンパスには多くの高校生が参加 〉

○海外連携教育プログラムの拡充

協定校・交流パートナー校を開発、活性化し、日本人学生に対するグローバル教育環境の整備・強化、海外からの優秀な留学生確保など質の高い学生交流の枠組みを開発・確立するための取組を実施した。平成27年度にはインドネシア大学等、新たに40件の交流協定を締結、自然科学分野で4大学とダブルディグリー協定を締結した。また、協定校から教員を招へいし、工学、薬学、医学領域の大学院生を対象に国際シンポジウムやセミナーを実施し、国際共同研究を基盤とした教育を提供した。更に、国際先端医学研究機構(IRCMS)ではインターンシップ学生受入プログラムを実施し、7ヶ国8名が参加し、高度な実験手技習得を目指し研究に取り組んだ。



〈 インターンシップ中の学生 〉

■ 大学の特性を踏まえた特徴ある取組

○国際先端研究拠点における国際的な研究ネットワークの構築

生命科学系国際共同研究拠点の下に研究組織を戦略的に統括する国際先端医学研究機構(IRCMS)を設置した。国際セミナー・シンポジウム等により世界から一線級の研究者を招聘するとともに、国際公募を通して優秀な先導的若手研究者の発掘・育成を行った。

また、自然科学系研究拠点においては、各研究グループ単位において海外研究機関との間で計14件の国際共同研究の覚書を交わし、研究者間における国際研究ネットワークが推進された。



〈 IRCMSにて国際セミナーを開催 〉

4. 取組内容の進捗状況(平成28年度)

【熊本大学】

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

○ 大学の国際化のためのグローバル教育カレッジの活動

英語による教養教育科目(グローバル科目)を全学の教養教育に正式に導入し、平成27年度の20科目から31科目へ拡充し、延べ612名の履修があった。学生の英語力向上のための授業外英語活動イングリッシュ・トークモンを開始し、年間約520名の学生が参加した。学生の海外留学促進のための取組であるIELTS講座を年間2回から4回実施に拡充し85名(昨年度38名)が参加した。また、熊本県内初のIELTS団体受験を本学で2回実施し、40名が受験した。た、官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラムについては、平成29年度前期(第6期)の募集(平成28年7月～10月)から、本制度に採択され、すでに留学を終えたトビタテ生にも協力を仰ぎ、書面審査及び面接審査対策の体制を整えることで、過去最多の10名が採択された。

○ 海外拠点の増加

本学の重点地域であるサブサハラ地域に「熊本大学スーダンオフィス」を設置し、当該地域における本学の海外広報と薬学分野における現地派遣プログラムの実施の準備を整えた。また、国立六大学国際連携機構の枠組みの下で、オランダ・ライデンに「国立六大学欧州事務所」を設置し、オランダをはじめとした欧州全域における本学のプレゼンス向上と、今後の学術・学生交流への足掛かりとした。

さらに、中国・上海市において、中国人の元留学生を中心に、本学の海外同窓会の一つとなる「熊本大学中国校友会」が設立され、中国における本学同窓生のネットワークを活用した大学の活動を活発化させる体制が整った。



〈「熊本大学中国校友会」設立式典〉

ガバナンス改革関連

○ 熊本大学グローバルアドバイザリーボードの開催

本事業の外部委員会として、第1回目の「熊本大学グローバルアドバイザリーボード」を平成29年1月27日に開催。海外大学からの外国人委員2名を含む5名の学外委員を迎え、本事業の進捗状況と本学のグローバル化のための課題について意見交換を行うとともに、今後の取組推進に向けて多くの有益な助言を得た。また同日、委員会終了後に本事業の「熊大グローバルYouthキャンパス」事業の一環として、外国人委員2名による一般向けの特別セミナーを開催した。セミナーでは、地域の高校生、高校教員、教育関係者、本学の学生・留学生等を対象に、異文化理解、グローバル体験とキャリアの形成等についての講演が行われ、約160名の参加者を集めた。

教育改革関連

○ 熊本大学グローバルリーダーコース(GLC)

地域の問題をグローバルな視点で考え、果敢に行動できる人材の獲得のため、アドミッション・オフィス入試により、グローバルリーダーコースの学生48人を選考した。

その後入学予定者に対し、入学までの5ヶ月間Pre-GOKOH School Program(入学前セミナー)を実施した。本プログラムは入学後のグローバル教育を見据えたもので、本学のe-learningシステムを利用したWeb上での学修と、大学に来て受講するスクーリングを行った。また、入学後のカリキュラムであるGOKOH School Programの詳細を策定した。このカリキュラムはグローバルリーダーに必要な能力及び専門基礎力を学ぶ「グローバル学修プログラム」および、グローバルに活躍できる資質能力を身につける「グローバル課外教育プログラム」から構成される。特にグローバルリーダーコースの特色である「グローバル課外教育プログラム」は、授業だけでは修得が難しい国際対話力、情報発信力、創造的知性、リーダーシップの養成を目指している。



〈Pre-GOKOH School Programの様子〉

○ 大学教育統括管理運営機構の設置

入試、全学共通教育、教育評価を統括管理し、大学教育の質の向上および質の保証を確実に実行するための改革・改善を断行する組織として、平成28年6月に「大学教育統括管理運営機構」を設置した。大学教育統括管理運営機構において、教養教育の実施体制を再構築するとともに、平成29年度以降の教養教育を教育の質保証の観点から見直しを行い、留学生と日本人学生が共通な言語で学ぶ科目区分「Multidisciplinary Studies」を新設し、外国人教員が中心に担当する英語による授業科目13科目25テーマの開講を決定するなどリベラルアーツを中心とする教養教育に改編した。その他、教養教育におけるクォーター制の部分的導入（平成29年度から本格導入）、グローバルリーダーコースにおけるAO入試・入学前教育の実施及び教育プログラムの構築において、先導的な役割を果たし、グローバル化に向けた教育改革を実施した。

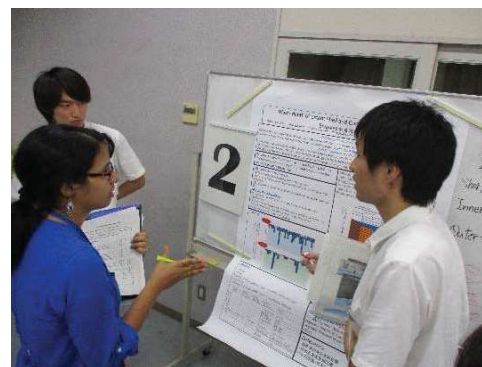


〈大学教育統括管理運営機構の設置〉

■ 大学独自の成果指標と達成目標

○ 熊大グローバルYouthキャンパス事業

熊本県内のSSH指定校の生徒が様々な科学的な研究テーマについてポスタープレゼンテーションを行い、熊本大学の留学生が研究方法や結果について英語で質疑応答を行った。また、SGH指定校にも留学生を派遣し、英語論文チェック指導の協力を行った。その他、南阿蘇など県内の遠隔地に留学生を派遣し、小中高生を対象とした国際交流事業を実施し、地域のグローバル化に貢献した。学内では、夏目漱石の俳句を英語で詠む「Soseki Global Cafe」を開催したほか、「Go Global Seminar」では、高校生のキャリア教育として世界で活躍する人材による講演を行った。上記を含め、平成28年度実施した12件のイベントには499名の高校生が参加した。



〈SSH高校生の英語によるプレゼンテーションにコメントする留学生〉

■ 大学の特性を踏まえた特徴ある取組(タイプBのみ)

○ 国際先端研究拠点の強化

平成28年4月、熊本大学の自然科学分野の研究組織を戦略的に統括し、国際先端研究の実施、国際共同研究の推進、自然科学系研究拠点の育成及び再構築、テニュアトラックを基本とする人事制度のもと先導的若手人材の発掘育成、併せて世界トップクラスの研究機関とも連携し、世界一線級の特徴的な研究の伸長と新たな領域の先鋭化、更に部局の枠を超えた融合研究を推進することを目的として国際先端科学技術研究機構(IROAST)が設置された。今後、国際セミナー・シンポジウム等により世界から一線級の研究者を招聘等の活動を通して自然科学分野の研究力をなお一層強化し、平成27年に設置された国際先端医学研究機構(IRCMS)とともに世界をリードする新たな分野の創出に向けて先導的国際研究拠点を形成することを目指す。



〈海外からの招聘研究者が学長を表敬訪問〉

■ 自由記述欄

○ 熊本地震発生時の留学生の活動

平成28年熊本地震発生後、一時避難所として、開放された本学の体育館においては、学生ボランティアによる避難所の運営が行われた。留学生もボランティアに参画し、連絡事項の外国語対応等様々な支援を行った。また、グローバル教育カレッジオープン教育センターの主催により、留学生が中心となって外国語と日本語レッスンや書道、折り紙、ヨガ、アートセラピー、トルコとポーランドダンス、映画等の様々な活動を提供した。この活動は、被災した本学学生や地域の方々を元気づけたいとの思いから、留学生とグローバル教育カレッジの教員により実施されたものであり、熊本大学の学生のほか、避難されていた地域の方々も多数ご参加をいただき、開催された4日間の参加延べ人数は合計269名であった。



〈震災発生時のボランティアによる支援〉

5. 取組内容の進捗状況(平成29年度)

【熊本大学】

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

○ 学生・留学生の流動性の向上

熊本大学の海外交流協定校に在学する学部生を対象に、7月にサマープログラムの英語コースに68名を受け入れ、平成30年2月にスプリングプログラムの英語コースに44名及び日本語コースに7名を受け入れ、留学生の受入増加を図ることができた。

本プログラムにおける日本人学生との交流により、日本人学生のグローバル化への相乗効果も図ることができた。

また、各プログラムの中で、本学への留学のための方法・手続き等を説明することにより、本学正規生や短期留学プログラム生としての入学を促した。



〈 スプリングプログラム英語コースで高校生と交流 〉

○ 地域の外国人への日本語コースの開講

留学生や外国人研究者及びその家族が日本で生活するために必要な日本語の基礎を学ぶ機会を提供するため、10名の受講者に対し全12回の初級日本語講座を実施した。これまでは留学生の大学院生や外国人研究者に限定した初級日本語講座を実施していたが、今回から家族にも門戸を広げ、新規に渡日したばかりの留学生や研究者の家族も初級日本語を学べるようになった。今年度は、10名の受講者のうち5名が家族の参加であった。



〈 日本語講座の様子 〉

○ 海外同窓会の設立に向けた準備

平成30年3月ベトナム・ハノイにおいて同窓会を開催し、本学で3番目の海外同窓会となるベトナム同窓会組織の設立にむけた準備を行った。



〈 ベトナム・ハノイ同窓会 〉

○ 国際的な広報活動

本学の日本語版Webの「教育情報の公表」ページの英語化を行い、英語版大学Webページへ掲載した。

また、日本人学生向けの留学促進動画を作成し、日本人学生の海外留学者数の増加を目指すとともに、海外交流協定校の学生向けに本学をPRするポスターを作成し、海外交流協定校へ配付することにより、留学生受入増加に向けた取り組みを行った。

ガバナンス改革関連

○ 地域へのグローバル教育の発信・波及

平成30年3月「大学のグローバル化と地域に根ざしたグローバル人材育成」と題し、熊本大学スーパーグローバル大学創成支援事業シンポジウムを開催した。地域のグローバル化を取り巻く状況での様々な課題解決に向けての情報共有と意見交換を目的として開催。第1部では本学の取り組みと今後の展開、特徴的な取り組みを紹介するとともに、第2部では国内他大学から3名の講師を招き、各大学の地域におけるグローバル人材育成の先導的な取り組みをテーマに講演いただいた。県内外の高校、大学、企業から100名以上の参加があり、地域への本学の取り組みと成果をアピールすることができたと同時に本学のグローバル化の取り組みを地域へ波及させる効果が期待できる。



〈 熊本大学スーパーグローバル大学創成支援事業シンポジウムの様子 〉

教育改革関連

○ グローバルリーダーコース(GLC)の取り組み

独自のカリキュラムであるGOKOH School Program(「グローバル学修プログラム」と「グローバル課外教育プログラム」)を実施した。とりわけ「グローバル課外教育プログラム」では、GLC Foundation Seminar(毎週開催)、合宿研修(6月)を実施し、加えて、海外インターンシップを地元企業と連携し、8月に行った。参加した6名は、中国の香港で開催されたビジネスエキスポにて、来場者へ商品を説明することで英語力を磨くことができた。また、新たにグローバルリーダー養成のための海外短期留学プログラムを複数企画した。そのうち、インドネシアにて2月に実施したプログラムでは、20名の学生が参加した。本プログラムは語学研修とは異なり、フィールドワークを中心として行う独自の内容であり、参加者は主体的に課題に取り組み、リーダーシップの資質を伸ばすことができた。

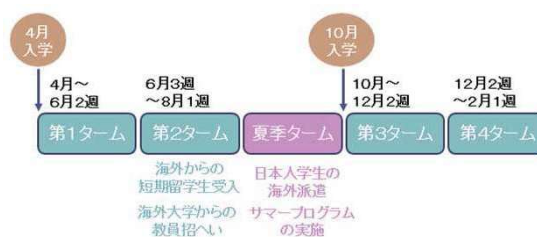


〈 海外短期留学でのフィールドワークの様子 〉

○ 教育のグローバル化への制度整備

教育のグローバル化を推進するため、学期の設定について、学則の改正及び学事暦の変更等を行い、「4ターム+夏季1ターム」の「4+1ターム制」を整備した。

これにより、授業科目の特性に応じて最も教育効果のあるターム(授業期間)設定が可能となった。また、海外大学の夏季休暇を利用した短期留学生の受入や、日本人学生についても、夏季休暇期間を利用することで、学期中の授業を欠席することなく短期留学が可能となったほか、学修期間の短縮や大学院への早期入学が可能となった。



〈 4+1ターム制への移行 〉

■ 大学独自の成果指標と達成目標

○ 熊大グローバルYouthキャンパス事業

SSH・SGH指定校が実施する研究テーマ別のプレゼンテーション、ポスタープレゼンテーション等に教員及び留学生を派遣し、高校生183人に対し英語による実践的な指導を行った。

国内外でグローバルに活躍する社会人のライフストーリーを通して自らの未来を描くロールモデルカフェ、海外の留学生を対象に実施するサマープログラム及びスプリングプログラムで留学生と英語で交流するMeet & Greet、オープンキャンパスでの英語による授業を体験するSummer Festa、学園祭でラフカディオ・ハーンの英語演劇を披露したSoseki Global Café等を実施し、高校生297人に英語を通じた様々な国際交流体験を提供した。その他の取り組みとして熊本市内の中学校が実施する国際交流イベント等に教員・留学生を派遣し、中学生79名と英語による国際交流を行い、地域の早期グローバル教育に貢献することができた。



〈 ロールモデルカフェの様子 〉

○ 海外連携教育コース

海外連携教育コースとしてのダブルディグリープログラム等の開発のための学内支援事業を7月、1月に実施。7月、1月ともに5件ずつ計10件の補助を行い、平成29年度は海外連携教育コースを新たに2コース増設し、計16コースとなった。これにより多彩な教育プログラムの提供が可能となり、学生のモビリティを向上させる環境が充実した。

■ 大学の特性を踏まえた特徴ある取組(タイプBのみ)

○ 外国人留学生への就職支援

外国人留学生の日本国内への就職支援のため、「留学生就職推進室」を設置。実践的なビジネス日本語教育、地域や国内で働くことの意味を深めるキャリア教育、就職に必要なスキルを取得する各種講座、電子カルテによる留学生の個別就職指導等を実施している。また、留学生が自主的に企業・就職情報を収集し学習できるキャリアトレーニングスタジオやラーニングコモンズ(交流学習室)等の環境整備なども行っている。今後、更に熊本県や県内経済団体等との連携を進め、留学生向けのインターンシップや企業関係者との交流会等の機会を増やしていく予定である。



〈 キャリアトレーニングスタジオでの就活指導 〉

6. 取組内容の進捗状況(平成30年度)

【熊本大学】

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

○ 対日理解交流促進に向けた各種取組

外務省による対日理解促進交流プログラム事業「カケハシ・プロジェクト」に初めて採択され、米国フロリダ州マイアミとの相互交流を行った。Miami Dade Collegeの学生及び引率者25名の訪問を受入れ、本学学生との交流や日本文化に関する講義・文化体験を通じて日本についての理解促進を図った。また、本学の派遣団25名も米国を訪れ、在マイアミ日本国総領事館の訪問及び現地の日系企業の視察を行うとともに、現地の大学・高校を訪問し、熊本地震の経験や日本文化についてプレゼンテーションを行うことで、日本及び熊本の特色・魅力を現地の学生に伝えた。



〈 訪米の際の現地学生との集合写真 〉

○ 日本人学生の海外派遣支援

全学部・大学院の学生を対象とした語学研修等の新規派遣先(ラトビア、カナダ、フィリピン)でのプログラムを開発・実施し、夏季・春季合わせて11回の短期留学プログラムを実施した。これにより、多様な海外体験の機会の提供や、プログラム内容の充実に繋がり、日本人学生の海外派遣数増加を図ることができた。
また、「トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」の採択件数増を図るため、平成30年度より申請書の書き方に関する説明会を新たに実施し、申請者数の増加に繋がった。



〈 ラトビアで現地の文化体験を行う本学学生 〉

○ 国際的な広報活動

平成31年3月「国立六大学連携コンソーシアム(千葉大学、新潟大学、金沢大学、岡山大学、長崎大学、熊本大学)」の活動の一環として、ASEAN各国(ミャンマー、ラオス、インドネシア、タイ)で実施されたアカデミックセミナーに参加し、大学紹介を実施するとともに、現地教員との交流を行った。特にインドネシア・スラバヤでは本学現地オフィス及び協定校のスラバヤ工科大学と協働してセミナー運営を行い、200名を越える現地学生に国立六大学の紹介を行った。海外オフィスとアライアンスを活用した効果的な広報活動により、本学の認知度を向上させた。



〈スラバヤ工科大学におけるアカデミックセミナー〉

○ 外国人留学生への就職支援

「留学生就職推進室」を中心に外国人留学生の日本国内への就職支援を実施した。ビジネス日本語教育としてビジネス日本語等のクラスを計10クラス開講し、キャリア教育として企業の経営者や人事担当者、留学生OB・OGによるセミナーを計16回実施した。その他、インターンシップ参加支援及び各種講座の提供を行った。また、本学の日本人学生からなる「グローバル・スチューデント・アシスタント」を新たに組織して留学生支援を実施し、留学生の日本語コミュニケーション力向上と日本文化及び日本企業への理解を深めることができた。



〈第7回 キャリアセミナー集合写真〉

○ 新たな海外拠点及び同窓会の設置

平成31年3月に台湾・台南市に台湾南台オフィス新規設置し、開所式を実施した。本学の協定校である南台科技大学および本学の共催で実施した同式には、両大学の関係者など約40名が出席した。同式は現地メディアにて広く扱われ、本学の認知度向上につながった。
さらに、同オフィスの開所式に併せて台湾同窓会を初めて開催し、台湾同窓生による台湾内における本学の情報発信体制の構築につながった。



〈 台湾南台オフィス開所式 〉

ガバナンス改革関連

○ クロスアポイントメント制度の整備

国内外の他機関との連携により本学の教育研究活動の更なる充実・強化及び活性化を図るため、クロスアポイントメント制度に関する規則を整備し、平成30年4月より施行した。規則の整備により、今後は本制度を利用した優秀な人材の受入を促進することができ、本学の教育研究等の更なる向上に寄与することができる。

教育改革関連

○ グローバルリーダーコースにおけるプログラムの多様化

グローバルリーダーコースの特徴である「グローバル課外教育プログラム」では、グローバルリーダー養成のためのフィールドワークを中心とした海外短期留学プログラム(マレーシア)を平成30年8月に実施した。参加者12名は、平成30年4月から行った受入大学の教員との事前学習により、渡航前にプログラムの課題が明確となり、現地入りしてすぐに主体的に課題に取り組むことができた。加えて、同様の事後学習を行い、リーダーシップの資質を確実に伸ばすことができた。また、2年次の課外活動としては、グローバルリーダーコースの1年間の活動をまとめた「GLC Magazine」を発行した。

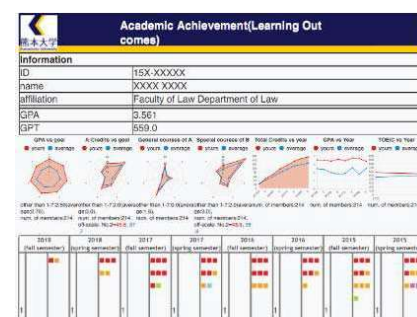


〈 海外短期留学プログラム(マレーシア) 〉

○ 教育のグローバル化の更なる推進

平成30年度は英語による科目(「Multidisciplinary Studies」)を28テーマから36テーマ(13科目)へ増加させ、外国人留学生の受講者数が増加した。これにより、日本人学生が外国人留学生と一緒に学ぶ機会がさらに増え、グローバル意識の向上につながった。また、「Multidisciplinary Studies」の内容の高度化の一環として、スペイン、タイ、フィリピンから教員を招へし、オムニバスで実施するグローバル・チーム・ティーチングの授業を新規開設した。

また、成績評価、GPA、修得単位数、英語外部試験スコア等をグラフ化し、学生の学修成果を可視化する「学修成果可視化システム(ASO)」について、登録されているデータを出力する機能を整備した。英語表記での出力を可能としたことにより、海外を含む進学・留学等において、自身の強みとなる部分や成長度を視覚的にアピールする資料として活用することが可能となった。



〈 学修成果可視化システムで出力する「学修の記録」 〉

■ 大学独自の成果指標と達成目標

○ 熊大グローバルYouthキャンパス事業の拡充

本学のグローバルリーダーコースの認知度が向上したことにより、海外からの留学生と英語で交流する「Meet & Greet」やオープンキャンパスにて英語による授業を体験する「Summer Festa」に、SGH校をはじめ、グローバルリーダーコースに興味を持つ高校生の多数の参加があった。参加者からグローバルリーダーコースへの問い合わせも多数あり、志願者増へつながらるものとなった。さらに、現在、県内高校生を対象とした国際感覚豊かな人材養成のための英語によるグローバル教育を実施する英才塾の設置を目的としてWGを立ち上げ、「高校生のためのグローバルリーダー育成教育プログラム」の試行準備を進めている。



〈 「Summer Festa」での英語による授業体験 〉

○ 教育のグローバル化の推進と地域への波及を目指したFD研修

英語による科目等を提供する体制の整備、及び次世代の教育・研究現場をリードする教員の英語による教授力・コミュニケーション力の向上を主たる目的として、平成30年9月及び平成31年3月に講師招へい型のグローバルFD研修を実施した。特に3月の研修は、教育のグローバル化の取組の効果を地域へ波及させるため、熊本県内の大学等が加盟する一般社団法人大学コンソーシアム熊本と共催で実施し、県内他大学からも参加者を募ることで、より広い対象者に研修の機会を提供することができた。



〈 平成30年9月FD研修 〉

■ 大学の特性を踏まえた特徴ある取組

○ 国際先端研究拠点における多彩な取組

本学の生命科学及び自然科学分野の国際的な研究力向上を図ることを目的として設置された国際先端医学研究機構(IRCMS)及び国際先端科学技術研究機構(IROAST)では、平成30年度にIRCMSで12回、IROASTで28回のセミナーを開催し、国際先端研究の学内への波及に努めた。加えて、平成30年10月及び平成31年1月には、IRCMS、IROAST及び韓国科学技術院(KAIST)が共同でジョイントシンポジウムを2度開催し、分野の垣根を越えた国際的な共同研究の創生・促進に寄与した。



〈 第2回KU-KAISTジョイントシンポジウム 〉

7. 取組内容の進捗状況(令和元年度)

【熊本大学】

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

○ 留学生からの発信・交流

本学で日本語を学ぶ留学生が、留学を通して得た経験や知識を日本人学生に対し日本語で発信する交流イベント「ポスター・セッション2019」を、7月と12月の2回にわたり、黒髪北キャンパス附属図書館にて実施した。このイベントは、留学生からの発信を通じて、留学生と日本人学生との交流の場を設けるとともに、日本人学生に対しては、海外への興味関心等を持ってもらうことを目的としている。発表する留学生は、7月は全員そろいのTシャツを、12月には民族衣装を着て自国の食文化等を披露し、来場者や日本人学生達との交流を図った。なお、この様子は地元のメディアにも取り上げられた。セッション終了後のアンケート結果によると、参加者の満足度は高く、さらなる言語習得への刺激や海外留学への興味が湧いたとの声や、今後の継続について期待の声があった。



〈発表者の集合写真〉

○ サマー・スプリングプログラム

本学の協定校に在学する学生に対する交流プログラムとして、サマープログラム(7月)及びスプリングプログラム(2月)を実施し、それぞれ57名と36名の参加があった。このプログラムは、短期の日本滞在を通して、日本の良さや熊本の良さを体験する機会を提供し、将来的に本学への留学意欲を高める目的で実施している。プログラムでは、グローバル教育カレッジでの講義、日本及び熊本の文化・歴史体験、実地見学旅行等を実施し、本学へ留学するための具体的方法・手続き等を説明することにより、本学正規生や短期留学プログラム生としての入学を継続して推奨することが出来た。なお、本プログラムには本学の学生がサポーターとして参加し、外国人学生と共同で活動を行うことで、本学学生のグローバル意識向上にもつながった。



〈日本文化体験〉

○ 日本語講座

熊本大学日本語講座は、本学の留学生、外国人教員や研究員とその配偶者が、日本で生活するために必要な初級日本語の基礎を学ぶもので、平成29年度から実施しており、令和元年度は黒髪北キャンパスで全8回、本荘キャンパスでは全2回を開講し、それぞれ81名と17名が受講した。講座では、ひらがなやカタカナレベルからはじめ基礎文法などを学習し、地域との交流や生活の際に必要な日本語及び日常生活に必要な日本文化や習慣について学んだ。

○ 熊本大学特別講演

令和元年10月、2011年から6年にわたってシンガポール大統領を務めたTony Tan Keng Yam博士による特別講演会「しなやかな国家建設のために-シンガポールの経験-」を熊本大学工学部百周年記念館にて開催した。講演では、著しい発展を遂げたシンガポールの国家建設メソッド、政治・経済の現状及び博士の考える日本の課題について概説された。講演会終了後には、原田信志学長から博士に対して、本学名誉フェローの称号が授与された。

Tony Tan Keng Yam博士の日本での講演は、シンガポール大統領退任後初のことであり、本学の教職員、学生及び地域市民に貴重な機会を提供した。



〈名誉フェロー授与の様子〉

ガバナンス改革関連

○ 国際担当副学長と部局長との意見交換

本学の副学長(国際交流担当)と7学部・6大学院の長とで意見交換を実施した。意見交換の場では副学長(国際交流担当)より、本学のこれまでのスーパーグローバル大学創成支援事業をはじめとした、国際関係の取り組みや、本学の長期的な国際戦略について説明があった。また、各学部長等からは、学部・大学院における固有の国際関係の取り組みや国際交流状況の説明、課題の共有、今後の方針について説明がなされた。

本意見交換により学内における国際関係の取り組みについて情報共有がなされ、本学の国際戦略について再確認を行うことが出来たとともに、全学部・大学院一体となった国際事業の推進の方向性が確認された。

教育改革関連

○ グローバル課外教育プログラム

グローバルリーダーコース(GLC)においては、特色ある教育活動として「グローバル課外教育プログラム」を提供している。毎週実施される「GLC Foundation Seminar」と題した課外活動では、本学に在籍している留学生との交流や学内外から講師を招いた特別講演会に加え、地域の課題をグローバルな視点で捉え、国際対話力を培うことを目的とした合宿研修を実施した。さらに、長期休暇中には、インドネシア、マレーシア、ラトビアから渡航先を選択できる海外短期留学を提供している。行き先ごとに防災や多文化共生、リーダーシップ養成等について学習した。

■ 大学独自の成果指標と達成目標

○ 熊大グローバルYouthキャンパス

熊本県内の中高生への早期グローバル教育及び国際交流活動の機会を提供するため、サマープログラム及びスプリングプログラムに参加している交流協定校の学生と英語で交流する「Meet & Greet」や、オープンキャンパスにて英語による授業を体験する「Summer Festa」等計13件の事業を実施し、SGH校をはじめとする熊本県内の高校から901名の参加があった。また、国際感覚豊かなグローバル人材養成を目的とした英才塾「高校生のためのグローバルリーダー育成教育プログラム(肥後時習館)」を試行的に開講し、県内の高校生33名が参加した。本プログラムでは、高校生が英語による講義や演習、留学生との交流等を通じて、英語の実践的コミュニケーション能力の向上や、高校の授業では得られない深い学びと自ら探求する学習を経験した。その他、県内各地の中学・高校に留学生を派遣して国際交流事業を実施する等、地域の早期グローバル教育に貢献した。

○ DDP合同カンファランス

令和元年12月、タイ王国マヒドン大学シリラ病院でDDP(Double Degree Program)合同カンファランスが開催された。本学医学教育部とマヒドン大学医学部シリラ病院、コンケン大学医学部、及びチェンマイ大学医学部との間でDDPが開始されたことに伴うもので、今回は、がん、感染症、脳神経の3つのテーマで発表が行われ、DDP候補となる学生を始めとする多くの学生・教員・研究者が参加した。また、合わせて今後の共同研究や学生・教員交流についての具体的な討議も行われた。

本学医学教育部では、グローバル化の一環として2018年から博士課程のDDPを導入、この2年間で5名の大学院生を受入れており、海外連携の強化・拡大を図っている。

○ COIL(Collaborative Online International Learning)による国際協働学習

グローバルリーダーコース(GLC)1年次生と、米国のニューヨーク市立大学スタテンアイランド校(CSI)との間で、COIL(オンライン国際交流学習)活動を行った。今回の活動では、国連の持続可能な発展目標(SDGs)をテーマに、Facebookを利用した活動を展開した。具体的には、グループに分かれて、SDGsの17の目標から1つを選択し、双方の学生によるビデオのやり取りやチャット、オンラインでのアンケート調査などにより、双方の国の現状やSDGsの達成状況についてリサーチ活動を実施した。その上で、活動を通じて得られた知見をグループごとにまとめ、GLC学生間でのディスカッションを行った。このCOIL活動による海外の学生との協働学習により、異文化理解やコミュニケーションスキルの習得に繋げることが出来た。

■ 大学の特性を踏まえた特徴ある取組(タイプBのみ)

○ GLC就職セミナー

令和元年9月に、就職活動を控えたグローバルリーダーコース生の就職に対するマインドセットを目的に、GLC就職セミナーを開催し、2、3年次生を中心に57名が参加した。民間企業、政府機関、研究者(本学教職員)から1名ずつ特別講師を招き、それぞれの所属機関の紹介や、世界を舞台に活躍する講師の職業観、海外の大学院に進学する方法とその後のキャリアパスなどについて講演いただいた。講演の後は個別の質問会を行い、講演の内容よりもさらに深い具体的な内容について参加した学生と講師との間で熱心な質疑応答が交わされた。参加した学生からは、「海外で働くことのモデルコースとして具体的に考えるきっかけになった」などの感想が得られた。



〈インドネシア留学での学習〉



〈肥後時習館〉



〈カンファランスでの集合写真〉



〈Facebookを使った活動の様子〉



〈講演会の様子〉

8. 取組内容の進捗状況(令和2年度)

【熊本大学】

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

○ COIL(Collaborative Online International Learning)による国際交流学習

熊本大学では、例年実施している本学グローバルリーダーコース生と米国のニューヨーク市立大学スタテンアイランド校とのCOILに加え、令和2年度、Multidisciplinary Studies科目を履修する本学学生とインドネシアのスラバヤ工科大学との間でもCOILを開始した。バイオマスの有効利用をテーマに開講したこのCOILにおいては、タイ、フィリピン、マレーシア、スペイン、オーストラリアの本学協定校の教授陣も含めたチームティーチングによるグローバルかつ多角的な講義に加えて、協働でディスカッション、交流活動を行うことにより、学生の異文化理解やコミュニケーションスキルの向上、ネットワークの拡大に繋がった。



〈 Zoomによる講義の様子 〉

○ 日本語講座

本講座は、本学の留学生、外国人教員や研究員とその配偶者を対象に、日本で生活するうえで必要な日本語の基礎を教えることを目的として平成29年度から実施している。新型コロナウイルス感染症の影響下にあった令和2年度においても、一部遠隔授業を取り入れることにより、継続して講座を開講した。遠隔での開催においても、アットホームな雰囲気の中、ひらがなやカタカナ、基礎文法を学び、地域との交流の際に必要な日本語及び日常生活に必要な日本文化や習慣について講義を行った。黒髪キャンパスでは全6回の開講で、計25名が参加。本荘キャンパスでは全2回の開講で、計17名が参加した。

○ オンラインツールを活用した広報活動

国立六大学連携コンソーシアム国際連携機構(国立六大学)のネットワークを通じた、ASEAN諸国(ミャンマー、タイ、ラオス、カンボジア等)への広報活動のほか、中央アジア、米国、南米及びアフリカ諸国といった全世界の学生・社会人を対象にしたオンライン留学フェアへ参加した。フェアでは、本学に在籍している留学生が、熊本大学及び熊本市での生活や経験談を共有した。

また、英語版ホームページを改修し、留学生インタビューや研究者による研究紹介に関する動画の掲載を行うなど、コンテンツの充実化をはかった。オンラインツール等を積極的に活用することで、コロナ禍においても、本学への留学希望者に対して継続的な情報発信を行った。



〈 Online Study in Japan weeks 2020 〉

ガバナンス改革関連

○ 国際人文社会科学センター設置

令和2年4月1日、熊本大学は大学院人文社会科学研究部附属国際人文社会科学研究センターを設置した。本センターは、熊本大学における人文社会科学の研究機能強化と研究成果の国際的な発信を行うことによって、本学の人文社会科学研究の国際的認知度の向上及び地域・社会貢献の推進を図ることを目的として設立されたもので、水俣病にまつわる研究等、地域を起点としつつも国際的発信にふさわしい研究プロジェクトを推進する。本センターは、熊本大学の国際的な研究力向上を目的とした組織として、国際先端科学技術研究機構、国際先端医学研究機構に続き設立された。今後は、この3組織を軸として国際通用性の高い研究・教育の推進に取り組んでいく。

○ エーゲ大学(トルコ)との学長懇談会

令和2年6月9日、熊本大学とエーゲ大学との大学間交流協定締結20周年を記念して、オンラインでの学長懇談会を実施した。エーゲ大学はトルコ・イズミールに位置する国立大学で本学と2000年に大学間協定を締結して以来、共同研究や人物交流を活発に展開している。エーゲ大学からは学長・副学長・工学部長ら7名が参加し、熊本大学からも学長・副学長をはじめエーゲ大学とゆかりのある教員が参加し、今後の交流計画について意見交換がなされた。この学長懇談会を機に益々の交流促進が期待される。



〈 学長懇談会の様子 〉

教育改革関連

○ GLC入学前教育

グローバルリーダーコース(GLC)においては、入試に合格した入学予定者を対象に、「Pre-GOKOH School Program(入学前セミナー)」を実施している。令和2年度は新型コロナウイルスの影響により、完全オンラインでの実施となったが、英語による演習や各学部でのガイダンス・講義等を行い、スムーズな高大接続に寄与した。また令和2年度より、入学後の単位修得の負担を軽減し、海外渡航などを積極的に後押しすることを狙い、入学前教育の単位化制度をスタートした。入学前セミナー期間中の学修成績に応じ、入学後に教養教育科目を履修したとして1単位を認定した。



〈 入学前セミナーの様子 〉

■ 大学独自の成果指標と達成目標

○ 熊大グローバルYouthキャンパス

オープンキャンパスの一環として例年実施している「サマーフェスタ」を令和2年度はオンラインで実施し、バーチャルツアーの配信やZoomを利用した留学体験発表、現役のグローバルリーダーコース生との対談を実施した。また、「高校生のためのグローバルリーダー育成教育プログラム(肥後時修館)」を実施し、将来のグローバルリーダーを目指す県内の高校生34名にオンデマンド及びオンラインによる特別授業やスクーリング等を実施した。さらに、高専との連携強化を図り、熊本高等専門学校2年生120名に対し、オンラインによる英語での講義を行う等、地域の早期グローバル教育に貢献している。



〈 オンラインによるサマーフェスタ 〉

○ 教育のグローバル化の推進と地域への波及を目指したFD研修

令和3年3月9日、新型コロナウイルス感染症の影響で国際的な移動が制限されるなか、新たな国際協働教育のあり方について広く事例を共有することを目的に、グローバル教育の推進に係るFD研修を実施した。本研修では、COIL(Collaborative Online International Learning)について、すでに本学でCOIL型授業を実践している2名の教員を講師に迎え、概要の紹介や実施上の留意点について事例を交えての紹介が行われた。また、一般社団法人大学コンソーシアム熊本に加盟する県内他大学からも研修への参加者を募ることで、地域へのグローバル教育の波及にも貢献した。



〈 FD研修の様子 〉

■ 大学の特性を踏まえた特徴ある取組(タイプBのみ)

○ 海外オフィスにおける国際交流の発展

熊本大学インドネシアITSオフィスは、平成22年4月の設置以降、熊本大学とインドネシアにおける学生及び学術交流、国際連携活動を促進してきた。令和2年4月より、国立六大学ないしは日本とインドネシアの交流を一層促進していくことを目的として、国立六大学スラバヤ事務所として共同利用を開始した。令和2年12月に、共同利用開始を記念する上掲式を行うとともに、インドネシアの学生に向けて、国立六大学の各大学紹介を実施した。教職員からの大学紹介に加え、在籍する学生や同窓生からも留学経験談を共有した。イベントには、250名以上の学生が参加し、終了後のアンケート結果によると、参加者の満足度は高く、日本留学への関心がより高まったとの声が多く寄せられた。また、令和2年10月には、タンザニア及びサブサハラ



〈 タンザニアオフィス 〉

アフリカ地域における共同研究拠点の位置づけとして、タンザニアオフィスを新規設置した。海外オフィスの国立六大学共同利用の開始・新規設置等をとおして、留学生に関する業務及び学術・教育交流の推進をはかる連携体制を構築した。

9. 取組内容の進捗状況(令和3年度)

■ 共通の成果指標と達成目標

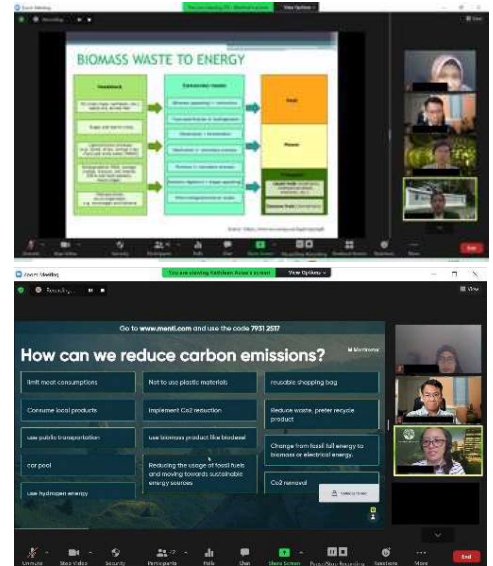
国際化関連

○ COIL(Collaborative Online International Learning)による国際交流学習、オンラインプログラム

Multidisciplinary Studies科目(英語による教養教育)の一環として、本学協定校であるインドネシアのスラバヤ工科大学(ITS)とCOILによる協働学習を実施した。本プログラムは、タイ、フィリピン、マレーシア、スペイン、オーストラリアの本学協定校の教授陣も含めたチームティーチングで実施し、本学とITSの学生がオンラインでディスカッションや交流活動を行った。

また、オーストラリア・シドニー工科大学、マレーシア・プトラ大学の学生と本学グローバルリーダーコース生との間でそれぞれオンラインによる交流プログラムを実施し、グループワークやプレゼンテーション等を行った。

これらの活動を通し、本学学生が日本にいながらグローバルな学びを体験し、様々な課題に対する複眼的な思考力やコミュニケーション力を養うことができた。



〈オンラインによる講義の様子〉

○ 日本語講座

本講座は、本学の留学生、外国人教員、研究員及びその配偶者を対象に、日本で生活するうえで必要な日本語の基礎を教えることを目的として、平成29年度から実施している。依然として新型コロナウイルス感染症の影響が大きかった令和3年度は、ほぼオンラインでの開講となったが、アットホームな雰囲気の中、受講者はひらがなやカタカナ、簡単な漢字や基礎文法を学び、併せて地域住民との円滑なコミュニケーションに必要な日本文化や習慣を学んだ。年間を通じ、63人が本講座を受講した。



〈日本語講座の様子〉

○ 多言語文化総合教育センター主催 国際シンポジウム

令和3年12月に、多言語文化総合教育センター主催で「現代のグローバル社会の課題に関する学際的国際シンポジウム2021~持続可能なポストパンデミックの世界~」を対面・オンラインのハイブリッド形式で開催し、国内外から55名が参加した。本学教員及び国内外のゲスト講師による講演やパネルディスカッション、グローバルリーダーコース生によるポスターセッション等を通じ、地域社会、文化、政治、Society5.0、教育等、様々な観点からパンデミック後の世界について課題を探り、SDGs達成への道筋について思索する場となった。

熊本大学多言語文化総合教育センター主催

現代のグローバル社会の課題に関する学際的国際シンポジウム2021

~持続可能なポストパンデミックの世界~

日時 2021年12月11日(土) 9:30~17:30
 募集人数 オンライン 250名 (Zoom使用)
 使用言語 英語・日本語
 申込方法 下記のURLもしくは右記のURLからお申し込みください。
<https://tinyurl.com/eektj3u> (申込期限: 12月5日/日)
 問合せ先 熊本大学多言語文化総合教育センター glc@jimu.kumamoto-u.ac.jp

09:30	開会
09:50	フォーラム: 持続可能なポストパンデミックの世界 松山 幸二 (総合地球環境学研究所/プログラムディレクター、特任教授) Kathleen Aviso (アラバマ大学教授) Lander Sims (熊本大学講師)
10:40	セッション1: 異なる文化的視点から地域社会の持続可能性について考える 北田 崇 (総合地球環境学研究所/プログラムディレクター、特任教授) 川原 泰 (国立環境研究所/環境政策課長) 高橋 隆之介 (オーストラリア大学教授) 原田 博彦 (熊本大学教授) 下田 謙太郎 (熊本大学准教授) 小松 ストラヘレナ (熊本大学教授) Joshua Rickard (熊本大学特任准教授)
12:00	休憩 日本刀演奏
13:00	セッション2: パンデミック時の国際社会における人間関係の比較研究 Reuben Babatundé Lewis (シラレネ大学教授) Krasny Janeslav (筑波大学) Lander Sims (熊本大学講師) Jincuo Wang (熊本大学特任講師) Phanis Alexander Aoi (熊本大学特任講師)
14:10	セッション3: カーボンニュートラルなSociety5.0の実現に向けた世界の展望 太田 幸明 (筑波大学教授) Jorge Beltrami (フィレンツェ工科大学教授) Anke Krueger (フェルツェン大学教授) Kathleen Aviso (アラバマ大学教授) Pattaraporn Kim-Lohsontorn (チュロンゴン大学教授) Armondo T. Quintan (熊本大学教授) Haru Prasad Desai (熊本大学特任助教)
15:20	セッション4: 日本留学で学ぶ日本語と日本文化 Faith Mucherwa (光復学生、ジンバブエ国) Colling Wang (光復学生、イギリス日本刀道場主) マズラン 美里子 (熊本大学准教授) 高橋 隆 (熊本大学特任講師) 吉里 さと子 (熊本大学特任准教授) 原 博彦 (熊本大学特任助教)
16:30	ポスターセッション 熊本大学とITSの学生による学修成果発表
17:10	閉会

ポスターセッションのイメージ写真と「FEST 2021」のロゴ

〈国際シンポジウムポスター〉

ガバナンス改革関連

○ 理事と部局長、理事とグローバルリーダーコース関係教員との意見交換

グローバルリーダーコースの更なる充実を図るべく、グローバル戦略担当理事と本コース生が所属する文学部、法学部、理学部、工学部の各学部長が意見交換を行った。また、グローバル戦略担当理事と本コースの学修プログラムや課外教育プログラムを担う大学教育統括管理運営機構の教員グループとで定期的なミーティングを実施した。これらを通して課題の洗い出しを行い、プログラムの見直しに着手したことにより、本コースの更なる質の向上が期待される。

教育改革関連

○ 全学生対象のオンライン英語教材提供

本学学生の英語力向上施策の一つとして、全学生を対象としたオンライン英語教材の提供を開始した。受講者は3つのコースから個人のレベルや希望に応じたコースを選択でき、24時間いつでも受講可能な利便性の高い教材となっている。令和4年度も継続して提供予定であり、自主的・主体的に英語を学ぼうとする学生に英語の学習環境を提供することで、学生の英語力向上及び英語学習の習慣づけが期待される。

■ 大学独自の成果指標と達成目標

○ 熊大グローバルYouthキャンパス

高校生に対する英語による授業や留学生との交流の機会提供として、熊本県立高森高校との連携による「南郷塾寺子屋」、宮崎県立高千穂高校との連携による「熊大高千穂塾」を開講した。また、「高校生のためのグローバルリーダー育成教育プログラム(肥後時修館)」を実施し、将来のグローバルリーダーを目指す県内の高校生64名に向けてオンデマンド及びオンラインによる特別授業やスクーリングを実施した。さらに、熊本高等専門学校及び有明高等専門学校の学生173名に対し英語による講義を実施した。加えて、オープンキャンパスの一環として例年実施している「サマーフェスタ」をオンラインで実施、多言語文化総合教育センターのバーチャルツアーの配信や高校生とグローバルリーダーコース生との対談をオンラインで実施した。

コロナ禍においてもオンライン等を活用し、高校生・高専生に対する早期グローバル教育を推進することができた。



〈 熊大高千穂塾 〉

○ 教育のグローバル化の推進と地域への波及を目指したFD研修

「オンラインを活用した国際共同教育の事例」～How to COIL (Collaborative Online International Learning)～をテーマに、グローバル教育の推進に係るFD研修を令和4年3月に開催した。

コロナ禍が続く中、オンライン教育や国際協働教育のあり方について広く事例を共有するため、本研修は本学教員だけでなく、大学コンソーシアム熊本加盟機関及び国立六大学国際連携機構の教員も対象とし、COILの基本的な特長だけでなく、「SDGs」や「Society5.0」をテーマとしたより具体的な取組事例や教授法を紹介した。Q&Aセッションでは、必要とされる英語レベルやCOILを実施する上で国際的な取り決めがあるのか等、様々な質問が上がり、コロナ禍における国際協働教育を推進させる一助となった。



〈 FD研修の様子 〉

■ 大学の特性を踏まえた特徴ある取組

○ 韓国科学技術院(KAIST)と熊本大学の合同セミナーシリーズ

国際先端医学研究機構(IRCMS)と国際先端科学技術研究機構(IROAST)は本学における生命科学系、自然科学系の先駆的な国際共同研究や融合研究を推進している。医理工連携等の異分野融合研究を強化し、新たな研究分野の発掘のため、令和3年7月から11月にかけて、本学の協定校である韓国科学技術院(KAIST)とオンラインセミナーシリーズ(Joint Invited Speaker Seminar Series)を開催した。全14回の本セミナーでは、KAIST、熊本大学、その他の機関の研究者による最先端の研究発表が行われ、延べ380名以上の参加者が情報交換や議論を行った。国際共同研究の更なる発展が期待される。



〈 セミナーポスターより 〉